

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370549

研究課題名(和文) 日本語の分裂自動詞性

研究課題名(英文) Split intransitivity in Japanese and Ryukyuan languages: focusing on case marking

研究代表者

竹内 史郎 (Takeuchi, Shiro)

成城大学・文芸学部・准教授

研究者番号：70455947

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は京都方言、熊本方言、琉球久高島方言、琉球与那国方言における格標示の分裂自動詞性について分析した。主な成果は次の三点である。(1)元来内在的主題性を有する動作主項が非主題となれば、脱主題化のための格標示が必要となり、このことが分裂自動詞性をもたらす。(2)脱主題化のための手段には格標示の他にイントネーションもありえ、イントネーションにおける分裂自動詞性も認められる。(3)主語の無助詞現象にも分裂自動詞性が認められる。上記に加え、京都方言と琉球与那国方言の分裂自動詞性が情報構造的に限定されることを考慮すれば、非対格仮説に基づく分裂自動詞性の説明よりもとりたて性に基づく説明がふさわしい。

研究成果の概要(英文)：This research was carried out with the main focus on split intransitivity in case marking in Kyoto Japanese, Kumamoto Japanese, Kudaka Ryukyuan and Yonaguni Ryukyuan. The conclusion is summed up into the following three points. (1)When agentive and non-agentive subjects are not topic, only agentive subjects are detopicalized by a kind of subject marking due to their inherent topicality. Split intransitivity in case marking is explained from the viewpoint of detopicalization. (2)Kyoto Japanese shows split intransitivity in intonation, and methods for detopicalization can include intonation as well as case marking. (3)Null subjects are divided into topic and non-topic in terms of split intransitivity.

Moreover, taking it into consideration that split intransitivity in Kyoto and Yonaguni is limited with respect to information structure, it is necessary that we explain split intransitivity on the basis of not the Unaccusative Hypothesis but inherent topicality and detopicalization.

研究分野：言語学・日本語学

キーワード：分裂自動詞性 本州方言 九州方言 琉球諸語 格標示 イントネーション 内在的主題性 脱主題化

### 1. 研究開始当初の背景

標準語書き言葉において主語は「が」によって、目的語は「を」によって標示される。このことから、他動詞の主語、他動詞の目的語、自動詞の主語のうち、他動詞の目的語だけが異質な扱いを受けるということで対格性を有するとされてきた。ところが、近年になって影山(1993)では、複合語形成のほか、格助詞の脱落、ゼロ代名詞の生起、受身などの現象において非対格動詞の主語と他動詞の目的語とが同様に振る舞う広範な現象が観察され、非対格仮説が日本語でも裏付けられることが論じられた。また、三宅(1996)でも、起点指向の移動動詞構文におけるヲ格の生起が非対格仮説にかなうという考察が行われており、その上で非対格動詞の主語名詞句の統語上の位置と他動詞の目的語の統語上の位置が等しいことを確かめている。このように、確かな証拠をもって多くの側面で分裂自動詞性が見出されたことで、実は標準日本語が多分に分裂自動詞性(非対格性)をそなえていることがわかってきた。標準日本語にこのような性質が認められるならば、時代語や地域語においても相当の分裂自動詞性が認められると予測される。実際、これまで先駆的な研究によって、時代語や地域語における分裂自動詞性が指摘されている。

例えば、かつての喜界島方言の格標示体系について考察した松本(1982)では、行為性の自動詞の主語の格標示と非行為性の自動詞の主語の格標示が異なることから、それが活格型であったことが主張された(ただし角田(2009)や佐々木(2007)による批判もある)。また、現代熊本市方言を扱った坂井(2013)では、人称名詞以外の主語名詞句を標示する場合、述語の性質が格標示を決定するとされ、すなわち他動詞文と行為性の自動詞文では「が」が、非行為性の自動詞文では「の」が用いられ、活格的な性質が認められるとする。一方、古代日本語においては、Vovin(1997)の指摘が重要である。Vovin(1997)では、助詞イが動作主格(active)、助詞ヲが非動作主格(inactive)とされ、奈良時代の格標示体系に活格性の存することが主張されている。これをふまえ、竹内(2008)、竹内(2012)は網羅した実例をよりよく整理しさらなる根拠を加えることで不十分さを補い、Vovinのイないしヲについての説を支持した。

しかしながら、時代語や地域語を対象とした領域では、分裂自動詞性の検証自体が大きく立ち遅れていると言わざるを得ない。このような状況を鑑み、本研究は、時代語や地域語の領域において積極的に研究を進めていく余地があると考えられる。

#### 参考文献

- 影山太郎(1993)『語形成と文法』ひつじ書房
- 坂井美日(2013)「現代熊本市方言の主語

- 表示」『阪大社会言語学研究ノート』11号
- 佐々木冠(2007)「第1章 格」小林隆(編)『シリーズ方言学2 方言の文法』岩波書店
- 竹内史郎(2008)「古代日本語の格助詞ヲの標示域とその変化」『国語と国文学』85巻4号
- 竹内史郎(2013)「古代語の動作主標識を巡って 助詞イと石垣法則」高山善行・青木博史・福田嘉一郎(編)『日本語文法史研究1』ひつじ書房
- 角田太作(2009)『世界の言語と日本語 改訂版 言語類型論から見た日本語』くろしお出版
- 松本泰文(1982)「琉球方言の主格表現の問題点 岩倉市郎『喜界島方言集』の価値」『国文学 解釈と鑑賞』47巻9号
- 三宅知宏(1996)「移動動詞の対格標識について」『言語研究』110号
- Vovin, Alexander(1997)On the syntactic typology of old Japanese, *Journal of East Asian Linguistics* 6, Kluwer Academic Publishers.

### 2. 研究の目的

本研究は、日本語の分裂自動詞性を見出し、その性質を明らかにすることを目的とする。この場合の日本語とは標準日本語、時代語、諸方言を含む広義の日本語を意味している。日本語の統語的な類型論的性格(syntactic typology)に言及する際、対格言語であるということが言われるが、影山(1993)等で述べられるように、標準日本語が分裂自動詞性(非対格性)を多分にそなえているのは間違いない。これに対し、時代語や地域語における分裂自動詞性の検証は立ち遅れており、これらの領域での研究の進展が望まれる。本研究は、広義の日本語を考察対象とし、日本語のより正確な統語的な類型論的性格の理解に至るための基盤を築いていくことを目的とする。

#### 参考文献

- 影山太郎(1993)『語形成と文法』ひつじ書房

### 3. 研究の方法

本研究は、さしあたり言語横断的に分裂自動詞性に関する考察を進めていくわけであるが、その際に、それぞれの言語の記述が個別に進められたのではうまくいかない。そこで、それぞれが考察において共有したのは次の諸点である。

- 無助詞現象を考慮する
- 焦点のあり方と有形格標示の出現の関係に留意する
- 類型論的な観点をふまえ主語標示の分布に着目する

琉球、九州、本州の方言に分裂自動詞性が認められることを確認し、それぞれにおける取り立て性と分裂自動詞性について比較対照

を行い、それらの共通性と多様性を吟味しながら議論を進めていく。

#### 4. 研究成果

本研究では、分裂自動詞性の現象を、京都、熊本、沖縄久高島、与那国に見出して、それぞれの分裂自動詞性を比較対照しながら考察を加えた。その結果、本研究の成果は、次の四つの項目において整理される。

- (1) 格標示における分裂自動詞性の説明
- (2) 取り立て性と格標示
- (3) 無助詞現象について
- (4) その他

まず、(1)に関する成果について述べる。これは学会発表の [及び](#) における成果である。格標示の分裂自動詞性を考察していくうちに、それを説明するはどうかこれまで分裂自動詞性の説明に用いられていた非対格仮説(Unaccusative Hypothesis)ではうまく説明できないのではないかということがわかってきた。それに代わって、脱主題化と動作主項の内在的主題性に基づく説明がどの方言にも当てはまる事が議論されることとなり、取り立て性が分裂自動詞性の基盤にあることが確かめられた。

次に(2)の成果について述べる。この成果は本研究の骨格をなすものと言える。学会発表の [は](#)、ある種の主語標示が取り立ての体系に組み込まれていることを論じたものであり、主語標示の歴史的变化をも視野に入れたものである。さらに、[によって](#)、取り立て性を基盤とする分裂自動詞性に格標示のみならずイントネーションが関わっていることが明らかとなった。

続いて(3)の成果について言及する。本研究では有形の格標示だけでなく無助詞現象についても十分な注意を払いながら考察を進めてきた。学会発表の [11](#) といったところがその成果である。大まかに言えば、無助詞主語には動作主かつ主題的なものと、非動作主かつ非主題的なものとが認められるということになる。この区別は先に述べた名詞句タイプの内在的主題性の有無と関係している。なお学会発表の [11](#) は、無助詞現象の背景には、文法関係を同定する際にどの手段(格標示、語順、有生性効果、文脈情報)を用いるかということが関わっていることを述べたものである。

最後に(4)についてである。本研究では、メインとなるテーマの他に格標示にまつわるさまざまな研究を行ってきた。具体的に示せば、学会発表の [12](#) [13](#) [14](#) そして雑誌論文 [など](#) である。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計4件)

[竹内史郎](#),「ミ語法における節の形成と意味」,蜂矢真郷(編)『論集 古代語の研究』,清文堂,45~66頁,2017年,査読無

[竹内史郎](#),「現代日本語における左方転位構文のタイプと起源」,青木博史・小柳智一・高山善行(編)『日本語文法史研究3』,ひつじ書房,189~212頁,2016年,査読無

[竹内史郎](#),「書評論文 高山道代著『平安期日本語の主体表現と客体表現』」,『日本語文法』15巻2号,くろしお出版,158~166頁,2015年,査読有

[竹内史郎](#),「事象の形と上代語アスペクト」,青木博史・小柳智一・高山善行(編)『日本語文法史研究2』,ひつじ書房,1~20頁,2014年,査読無

[学会発表](計14件)

[下地理則](#),「日琉諸語における分裂自動詞性と有標主格性」,成城大学大学院文学研究科・国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語の危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」共催シンポジウム「私たちの知らない 日本語 琉球・九州・本州の方言と格標示」(2017年7月2日,成城大学(東京都))

[坂井美日](#),「九州の方言と格標示 熊本方言の分裂自動詞性を中心に」,成城大学大学院文学研究科・国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語の危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」共催シンポジウム「私たちの知らない 日本語 琉球・九州・本州の方言と格標示」(2017年7月2日,成城大学(東京都))

[竹内史郎](#)・[松丸真大](#),「格標示とイントネーション 京都市方言の分裂自動詞性再考」,成城大学大学院文学研究科・国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語の危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」共催シンポジウム「私たちの知らない 日本語 琉球・九州・本州の方言と格標示」(2017年7月2日,成城大学(東京都))

[下地理則](#)・[新永悠人](#)・[坂井美日](#)・[竹内史郎](#)・[松丸真大](#),「日琉諸語の分裂自動詞性はどのように説明できるか?」,成城大学大学院文学研究科・国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語の危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」共催シンポジウム「私たちの知らない 日本語 琉球・九州・本州の方言と格標示」(2017年7月2日,成城大学(東京都))

[下地理則](#),「格・取り立てと無助詞現象 琉球語と九州方言を例に」,国立国語研究所共同研究プロジェクト研究発表会「格と取り立て」(2016年9月20日,国立国語研究所(東京都))

[竹内史郎](#),「主節の主語標示ガの発達について 中央語の歴史における」,国立国語研究所共同研究プロジェクト研究発表会「格と取り立て」(2016年9月19日,国立国語研究所(東京都))

下地理則,「焦点化と格標示」,第151回日本言語学会秋季大会ワークショップ(2015年11月29日,名古屋大学東山キャンパス(愛知県))

坂井美日,「九州方言における分裂自動詞性」,第151回日本言語学会秋季大会ワークショップ(2015年11月29日,名古屋大学東山キャンパス(愛知県))

竹内史郎・松丸真大,「関西方言の格標示のとりたて性と分裂自動詞性」,第151回日本言語学会秋季大会ワークショップ(2015年11月29日,名古屋大学東山キャンパス(愛知県))

竹内史郎・松丸真大,「本州方言における他動詞文の主語と目的語を区別するストラテジー 関西方言と宮城県登米方言の分析」,科研費・国立国語研究所共同研究プロジェクト合同シンポジウム「日本語のアスペクト・ボイス・格」(2015年8月21日,国立国語研究所(東京都))

下地理則・坂井美日,「九州琉球におけるガ系とノ系による主語表示 類型と歴史」,科研費・国立国語研究所共同研究プロジェクト合同シンポジウム「日本語のアスペクト・ボイス・格」(2015年8月21日,国立国語研究所(東京都))

坂井美日,「熊本方言における接辞-arについて」,第150回日本言語学会春季大会(2015年6月20日,大東文化大学板橋キャンパス(東京都))

松丸真大,「方言分布調査におけるデータの整備と活用」,国立国語研究所時空間変異研究系合同研究発表会「JLVC2015ワークショップ「日本語データの整備と活用」(2015年3月7日,国立国語研究所(東京都))

竹内史郎,「左方転位構文の歴史」,国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」研究会(2014年12月26日,国立国語研究所(東京都))

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

竹内 史郎 (TAKEUCHI, Shiro)  
成城大学・文芸学部・准教授  
研究者番号: 70455947

### (2) 研究分担者

松丸 真大 (MATSUMARU, Michio)  
滋賀大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 30379218

下地 理則 (SHIMOJI, Michinori)  
九州大学・人文科学研究科(研究院)・准教授  
研究者番号: 80570621

坂井 美日 (SAKAI, Mika)  
国立国語研究所・時空間変異研究系・研究

員

研究者番号: 00738916

### (4) 研究協力者

新永 悠人 (NIINAGA, Yuto)  
成城大学・非常勤講師

後藤 睦 (GOTO, Mutsumi)  
大阪大学大学院文学研究科博士後期課程